

# 教育方法学 最終レポート

## 目次

- 1章：チームで構想した学校
- 2章：多様な能力を持った学習者一人ひとりの学力を高めるための具体的な学習指導方法
- 3章：チームの学習と学習成果の評価について
- 4章：この講義の感想と希望

## 第1章

## 構想した学校の特徴について

### 陽葉月（ようはづき）小学校

#### テーマ

私たちが理想とした小学校は、山や森が近くにあるといった自然環境に恵まれた場所に位置し、且つ地域社会と密な場所にある。

#### ○学校名 陽葉月小学校

陽・・・太陽のことであり、元気で明るい子どもに育てて欲しいという思いを込めた。

葉・・・クローバーのことであり、クローバーは幸せの象徴とされることから、みんな仲良くという思いを込めた。

月・・・月のことであり、ほんのりと温かいさまから、思いやりをもった子どもとなるようにという思いを込めた。

#### 規模

少人数制の一学級二十人、一学年に二学級あり、教師の総数は三十人、一学級あたり二人である。

#### 学校目標

「よく考え、よく学び、よく遊ぶ」

サブテーマ「異年齢間での交流が盛んな学校」

児童自ら物事を正しく捉え、考えること、勉強と遊びのどちらかに偏るのではなく、勉強の時は勉強をし、遊ぶ時はとことん遊ぶというメリハリを重んじたことからであり、いずれも「よく考える」ということが軸として機能してくることであろう。異年齢間での交流とは、学年行事に際してクラスの枠を越えて、他学級・他学年みんな仲良く関わるということである。

#### 学校方針

「一つの取り組みをする際は、学校長を筆頭に全教員が協力、連携し徹底的に本気で取り組む」

一つのクラスで問題が起きたならば、担当教師が抱え込むのではなく、学校全体の問題と捉え、皆で協力し、子どもたちのために全力で取り組む姿勢である。

## 具体的な内容

### 学習方針

「基礎・基本を徹底し、個々のペースに応じた学習ができるようにする」

この方針を「個々のペースに合わせた学習」と「基礎・基本の徹底」の二つに分けて行うが、以下記す学校内容と合わせて説明していくものとする。

学校の内容は、**五つの柱**（授業・学習設備・ノーマライゼーション・フリースクール・体力づくり）から構成されている。

#### ○授業

（１）「近くの自然を活かし、自然、体験学習を取り入れ、机上の勉強ではなく経験に基づいた知識を得る。」

（２）“個々のペースに応じた学習”として「**少人数学級での T・T 制度**」

ここでは習熟度別などでクラス分けをしない。少人数制を取り入れた最大のメリットは、子ども一人ひとりがどの程度理解できているのかを把握ができることである。これは、子どもの学力をつくるためには大切なことである。子どもによって一人ひとり苦手な部分は違うので、それを教師が把握しておくことが、特に勉強が苦手な子どもの指導に必要となってくるからである。

#### \* T・T 制度について

**長所**・・・子どもの様子が見える。指導が行き届く。勉強のわからない子どもが減る。

授業がスムーズになる。子どもの意見を教師が拾いやすくなることが挙げられる。

**短所**・・・教師間の価値観の違いによる衝突が考えられるが、意見が出し合える話し合

いの場を持つことが大切である。また、時としては管理職の先生にも話を聞いてもらう必要がある。

また、監視されているように感じる子どもが出てくるのではないかとということも考えられるが、学校生活の中での教師の歩み寄り、子どもとの人間関係におけるバリアを失くしておくことが大切なことであろう。

（３）“基礎・基本の徹底”として「**放課後に勉強会**」

この勉強会は週二回行われ、主に内容は算数と国語を取り扱う。これは放課後に、その日に出た宿題や他のドリルなど学校に残って勉強をしようというものだが、自由参加であり、勉強ができないから出るといったたぐいのものではないことに留意したい。家庭の事情で塾に行けない子どもや、塾に行きたくても行けない子どもに対して勉強する機会を設

けることは、一定の学力を保障する機会としても効果的である。また、勉強会においては、本学のサブテーマとして掲げた「異年齢間での交流が盛んな学校」から、高学年の子どもたちが、小さな先生となり、低学年の子どもたちに勉強を教える取り組みをする。「お兄さん、お姉さんが教えてくれるなら」と教えてもらう側も楽しく学習でき、教える側も自分の理解を更に深め、自信を持つことに繋がるであろう。そして、この取り組みに子どもが参加することで授業以外で勉強する癖がつき、子どもの学習意欲の変化にも繋がると考える。

高学年児童による指導 → 低学年の学習が深まる → 高・低学年  
更なる理解へ

#### (4) 「朝の十分間読書」

朝の時間は短いながらも貴重な時間である。朝から脳を存分に働かせることによって、その日の学習の能率を上げることに繋がる。また、読書は国語の学力の基礎・基本能力を身に付けるものなので、毎日行う。緑溢れる豊かな自然を有効に利用し、時には外での読書も有意義であろう。

#### (5) 「算数の時間の始まりに、百マス計算」

算数の学力の基礎である計算力を付けるものであり、朝の読書と合わせて、全ての教科の土台とも言える学力を培っていく。

### ○学習設備

「パソコンをはじめ、情報機器を積極的に導入し、調べ学習に活用。次代を担う国際社会で活躍できる子どもを育成する」

今日程、情報が溢れ、時代の流れが速い時代はかつて無かったであろう。これからは、情報機器が扱えるだけでなく、あらゆる情報から確かな情報を引き出す力、それを判断する力がもはや不可欠である。また、これからの子どもたちは、海外で活躍するであろうし、それが可能となるようサポートしたい。

“基礎・基本の徹底”として、教師がパソコンで国語、算数の教材を作ってホームページに掲載し、子どもがフリースクールや自宅などでも学習できるように配慮したい。

## ○ノーマライゼーション

「障害児学級を常備し、校舎もバリアフリーとし、障害児を受け入れる体制が整っている。障害児と交流する機会を持つなど人権教育に力を入れている」

学校に障害児がいる、いないに関わらず常に設けている。ノーマライゼーション社会を築いていくには、心のバリアフリーが肝要である。障害児学級の児童と身近に関わり、バリアを失くすのではなく、持たせないことが大切であろう。また、人権教育に力を入れ、人権は大切であるという結果論にならず、なぜ大切なのかを学級で、じっくり考えられるだけの授業時間を用いる。

## ○本学最大の特色「フリースクール」

「学校に行きづらい子どもも、学校と常時連携の取れる付属の学校を併設することで、子どもの居場所を確保し、子ども全員が笑顔で通える学校」を作りたいと考え、フリースクールという形で設けることとした。また本学と付属の学校は、渡り廊下で繋がっており、往来は自由であるとした。

付属の学校については、子どもたちに理解してもらえるよう、本学の特色である人権教育で十分に触れることも大切である。家庭、地域の理解・協力も必要であろうし、学力低下の火付けにならないかという問題もある。「付属の学校へ通うようになったから、学力が上がった、下がった。意欲が下がったのではないか。次学年への認定が下りなかった。隣で遊ばれては、本学へ通う子どもの勉学への意志が削がれる」と保護者、教育学者から様々な意見や非難が飛び交うことが予想される。

しかし、それ以前の問題として、学力云々以前のこととしてこの併設に意義を見出していくべきであると考え。なぜなら、通う必要のある児童は、学校はおろか地域社会にすら適応していない事実があるからである。そのためにも、本学の方針を存分に発揮し、教師間が連携を密にし、カウンセラーを始め専門家との連携も密に取り合うことが大切であろう。児童間における優劣間、フリースクールへ通う児童に対する蔑視の眼差しが生まれないかといった問題については、本学の楽しい学校づくりにかかっているだろう。子どもに面白いこと、やりたいことがあれば、問題は起こそうとしない、起こしている暇はないのではないかと考えるからである。しかし、問題が起こらないとは言い切れない。そうした場合、個別指導ではなく、学級会を開き、公共の問題として取り上げ、考えさせることが大切であろう。

＊フリースクールの規模

一時的な居場所と考えているため、小規模であり、本学の一階分の大きさに相当する。

## ○体力づくり

「特別活動の種類が多く、二時間連続で行うなどのゆとりの中、活発に行い、体力の増進を図る」

いくら自然が豊かな地域であっても、利用しなければ価値が無い。存分に使うためには、時間的なゆとり、児童一人ひとりの心のゆとりが必要であろう。これを通して、自然と体力が付いていくのである。

### 給食

「無添加食材など食材にこだわり、栄養を考えた給食」

自然豊かな立地を活かし、子どもたちが、生活の時間・総合的な学習の時間に、山や森へ食材となるものを採りに行き、また野菜を栽培し、それを食べるという有意義なものである。野菜を栽培することで、食物への敬意の念を抱き、食事できることへの感謝の念を抱けるようにしたい。好き嫌いせず食べるのではなく、“大切だから食べる”ということ伝えていける給食としていく。

### 学校行事

学校行事が盛んで、地域社会の資源として学校を活かし、地域社会が気軽に参加できる大規模な運動会・学芸会を催し、親子の交流の場をつくり、地域に開かれた学校を目指すものとした。学校は、地域社会の中心ではなく、地域住民と双方に働きかけを行える場であり、家庭では、なかなか関わることができない、話す時間を持たない親子を対象として交流できる機会を提供できる学校を理想とした。

※理想を現実化させるには・・・

莫大な資金が必要であるが、特色を存分に生かすために公立ではなく、学校法人である必要がある。私たちが考えてきたことを企業や地域に訴え、賛同者を募り、資金集めをすることである。

## 第2章 多様な能力を持った学習者一人ひとりの学習力を高める

### ための具体的な学習指導方法

国語編

#### ①学習指導方法

小学生を対象とした国語科で、自己の意思を伝達できる、表現できるといった人間形成上欠くことのできない要素を培うために**作文教育**を行う

#### ②教科・方法選択理由<なぜ作文教育を行うのか>

昨年の六月、長崎の小学校で児童による児童殺害という痛ましい事件が報道され、教育問題、社会問題として取り上げられた。今や人間関係の希薄化は深刻であり、家族や友だちと関係をうまく築けない、気持ちや思いを表現できない、伝えられない児童が多く、その象徴がこの事件なのではないだろうか。自分が「その時、どう思い、どう感じていたのか」、自己の内面を知り得る場、意思を伝えられる場がもっと必要なのであり、それを作文にみることができるのではないかと考えたからである。

#### ③作文教育の役割

上に「人間形成上欠くことのできない要素を培う」と記したが、始めに作文教育でどのような教育的価値を見出すことができるのか考察する。

##### (1) 自己の物の見方、感じ方を深め、認識力を育てる。

文章を書くためには、書こうとする対象をよく見なければならない。例えば、昨日の出来事を文章に書こうとする場合、「昨日の何のことを書くか」をまず考えなければならない。どんなことが、いつ、どんな順序で行い、自分はどう感じ取ったのか内省する必要がある。その時流れていた事物を止め、深く掘り下げるところに作文教育の意義があるだろう。

##### (2) 人間の思考力を育てる。

文章表現活動は、思考活動と言えるだろう。言葉を使うということは、考えるということだからである。文章表現活動の外にも、読む・聞く・話すという、言葉を使う表現活動があるが、書くという活動は、言葉が紙面に記されるだけに、より意識的であり、自覚的な活動であると言える。

### (3) 人間として大切なそうぞう力を培う。

どういう言葉を使い、どう表現していくかという言葉の工夫や構想から、想像（創造）力を培う。

### (4) 人間としての生活全体を向上させる。

作文は、自分の生活全体を、自分の目で見つめ、そこから生まれた思いや感情を文章化していくものである。よって、そうしたものの土台である感動の心を育てる必要がある。

## ④作文における子どもの実態とその考察

### (1) 1, 2年生 「書くことがない」という子どもが多い。

発達段階から、経験したことがその場限りであったり、その直後までしか覚えていなかったりすることがある。また、昨日の生活の中には、取り立てて作文に書くことが無かったということもある。このような子どもにとって、文章（生活文）を書くことは、大変な負担となってしまう。「書くことがない」という児童が多い場合は、共通の経験した題材を用意するとよいのではないだろうか。

### (2) 3, 4年生 書き方がわからない。

書ける児童は、原稿用紙に7枚も8枚も書く。しかし、一方で、いくら時間をかけても、1枚、あるいは1枚半位という児童もいる。そうした児童は、書きたいことがあっても、それをどう表現し、文にしたらよいのかわからないということが多い。

例えば「お買い物」のことを書くとする。どんな順序でしたのか、まとめりごとに書く事柄を整理しなければならない。また、様子を表す言葉や会話を入れたりしなければならない。あるまとまった文章を書くためには、こうしたいくつかの文章を書き、繋げる技能が身に付いている必要がある。書き方がわからない児童には、まず今日、友達と話した会話や教師の動作の様子を書かせるなど単的なものを書かせるるとよいと考える。

### (3) 5, 6年生 書くことが面倒臭い。

低学年から中学年にかけて、文字を書くこと、特に漢字を書くことが面倒臭いという児童はかなりいる。そして、高学年になると文章を書くことを面倒臭がるという傾向が強い。

作文は、点数化されないため、目に見える成果として表れにくく、意欲が沸きにくい。また書いたことがどう生かされているのか疑問を持つためである。児童の生活や学習に結

び付いた題材で作文を書かせ、それを生活や学習に生かすことが、作文学習に興味や意欲を持たせることに繋がる。また、みんなの前で作文を読み合ったり、先生に適切な評語を書いてもらうことも、興味や意欲を引き出すことに繋がるであろう。

## ⑤具体的な学習指導方法

### (1)「生活日記」を書く

子どもは、その日あったことを自分の記録として書き留めるだけでは飽きてきてしまう。そのため、自分が見たこと、知ったこと、感じたこと、考えたことなどを教師や家族の人、友だちに知ってもらうため、わかってもらうために書くのだという気持ちで書かせる。意識を外に向けることで、生活を見る目も豊かになり、書くことによって考えをまとめたり、深めたりする作文能力が身に付くのではないかと考える。「あのね帳」はそのことを具現化したものと言える。また、児童は読んでもらうことに期待を膨らませるのだから、教師も返却時には、ノートの端に言葉を添えて返す必要がある。児童は、書くことに慣れるにつれ、日記を生活の一部と考えるようになれば、書くことを喜んで行うことであろう。

### (2) 作文発表をする

日記は誰かに知ってもらいたいという思いで書いている。日記を授業内で、みんなの前で読み、友だちからの共感や嬉しい言葉をもらい、更に書こうという意欲が高まり、先生や友だちに伝えるにはどういう言葉や表現を使えばよいか、また絵を描くなど、自己の意思を伝達することや表現できる力を身に付けることに繋がるものとする。

### (3) 低学年では、わからない文字は○をして書く

「わたし、き○う てつ○うで さかあがり できたの。」

このように、日常の話し言葉を文字に書き直せば、そのまま作文ができることから、書くことの抵抗感を取り除き、進んで書こうとする態度を育てる。

### (5) 取材ノート・作文スケッチ

気ままに友だちとの遊びや生活の様子を書き綴ったり、植物や昆虫、雲や天気の詳細な描写などするためのノートを一冊持たせる。気に入った文章の抜き書き、ふと考えついた擬声語などを書き留めるのである。それがどう役立つかは教師の役目であろう。

参考文献

編著者 藤原 宏 長谷川 孝士 八田洋彌 『小学校 作文指導実践事典』  
出版社：教育出版 1982年 pp.11-13 pp.34-37 pp.156-157 p.181 p.183

### 第3章 チーム学習の評価方法を考察する

まずチーム学習の意義について考察し、それらを踏まえて評価方法を述べる。

#### チーム学習の意義

##### 「脱」個による個人学習⇨広がりをもせるチーム内での個人学習

新学習指導要領では、一斉指導から「個」を重視した教育がなされているが、個人での学習では思考力や想像力に限界があると思われる。チーム学習では、他者と関わり学習を進めていく。そのため児童が話し掛けるのは、自分自身と活動を共にしているチームの仲間と先生である。例えば、私の実体験として教育方法学のチーム学習を進める中、次回の講義までにこれこれについて各々考えを深めておくとチーム内で決めたとする。「こうしてみてもどうだろうか。」と考えを巡らすものの行き詰まってしまった。一人で工夫点を生み出すのはなかなか頭のしんどい作業である。そこで、チームの仲間にアイデアを求める。すると、新たな考え方が返ってきて、考察が進むのである。これは、共通理解、共通目標があることを基盤としている。

##### チームのためにという意識と伴う責任

チームで活動しているという意識は、自分のためだけではなく、「チームのために」という意識を持たせ、学習が怠惰にならず、責任を持って学習を行うだろう。この責任は、私の場合、チーム学習をするに当たっての準備によく表れていたと感ずる。図書館で本を借り、またインターネットで情報検索を行った。チームで取り組んでいる問題に対して、過去三年間、講義で配布された手掛かりになりそうな新聞記事やレジュメを探すなどしたが、一人の学習活動ならばこれ程まで時間を要しなかったであろう。これらの行動は、個人で行動してはいるものの、チームの一員であることを常に自覚し、チームでの活動を想定して行動している。

##### 学びの土台

一人のアイデアや考え方、発見を通して、その時の気持ちを共有、共感し、学び合い、協力し合う中、メンバーの良さに気付き、互いに認め合い尊重する心、思いやる心を身に付けていくのではないかと考える。これらは、学習を進める潤滑油的なものとして最も大切なものである。これらがなければチーム学習はつまらないものであり、メンバーの考え方を非難し、各々が学習を勝手に進め、チームという形をとった個人学習に陥りかねないからである。そのため「チームの規範」が要となってくる。

### 学びの共有意味と共通目標

活動内容・学ぶことについて共有意味を持ち、明確な共通目標へチームとして進んでいく。この認識がずれていると学習は停滞するであろう。

### チーム学習は、班活動ではない

チーム学習は、班活動と違い、一人ひとりに役割がある。進行役、記録係、計画管理係、技術係などである。班長を筆頭に群れのように進むのではなく、自分の役割を果たし、学習を効果的に進めていくのである。

### 発表するという他に見せる目標

明確なスモールステップを設けるもとの、どんなことを発表時に話そうか、見せようかと第三者を意識して作業を行うことに繋がる。客観的に見て受け入れられるものなのか、実りに繋がるものなのか、新たな問題点や改善点が浮かび上がる良い機会である。発表したことから、達成感も得られ、次のステップに繋がることであろう。

### 共通目標の個人学習

学習が進むにつれ、個々の課題をチーム内学習から見つけだし、個々で考察、解決策を見出し、チーム学習に活かしていくのである。

### 参照 URL

伊藤正子 「少人数グループによる学習について」 鈴木ゼミ研究紀要第 11 号

<http://www.art.hyogo-u.ac.jp/hrsuzuki/students/itoh11.pdf> (2005.12.29 アクセス)

## 評価方法

上に記した意義（全7項目）を評価する基盤として捉える。

### 感想文による個人内評価を元に教師による評価

自分は役割をどの程度果たしたのか、どういう点を工夫したのか、児童に感想文で振り返らせるのである。それを元に教師が、上に記した意義をどれ程達成できたか、努力したか、評価シートに記していくのである。何点とかAやBといった評価はしない。個人には、得意なこと、不得意なことがある、性格も様々でそれぞれに良いところがあり、欠点がある。その児童なりに、どういったことを頑張っていたのか文書で記す方法を行う。

評価シート

1. ○○くんは、△△において、□□に取り組みチーム学習に貢献した。

### チーム学習の成果を高めるための要件・留意点について

- 一．チーム学習をいきなり進めるのではなく、打ち解ける機会を始めに持たせる。チームが同じで初めて話しをする児童もいるであろうし、個々の性格は全く違い、メンバーを少しでも事前に知り合う機会を持たせることが、以後の活動が円滑に行われると考えるからである。
- 二．チーム学習では、意見を出し合いながらも行き詰ることが想定される。その際は、調べ学習の方法や文献を教えるなど充実指導を行う。
- 三．チームの学習が円滑に進んでいるか、問題点がないか、教師は活動の様子を書き取る必要がある。

## 第4章 この講義の感想と希望

「理想の学校をつくる？どんなんやろ？おもしろそう！」これが、本講義を始めて受けた時の気持ちでした。これまで教育学の講義やテレビなどを通して、学校には〇〇が欠けている。こういう授業をしなければならないといったことを聞いたり、受けてきてきましたが、それらを自分で吟味し、自分たちが理想とするものに近づくよう模索していくのは初めての試みでした。チーム学習をしたのも初めてで、みんなで意見を交わし、まとまらなければ、再検討。この考えをみんなに伝えるにはどうしたらいいのだろうかと考えることもよくありました。本学へ編入学する前の他学部で学習してきたこと、本学で学習したことを存分に生かして学習を進めていきました。今までストックしてきた新聞や資料からチームの課題克服の手掛かりになりそうな情報を集め、メンバーに話したりしました。講義外での学習もしばし行われるなど、少しずつ理想の学校を築いていきました。大変で、忙しかったですが、逆に言えば、それだけ充実していたということなのでしょう。チームとしては、最高のものでした。助け合い、励まし合い活動をしていきました。三回生ということもあり、二回生と打ち解け合えるか不安でしたが、学習の始めに名前覚えゲームをし、仲良くなれたことでうまくいきました。

自分の書いたレポートをメンバーが評価するのは、ドキドキでしたが、改善点を書いてもらい嬉しかったのは、コメントの書き方の説明文が大変良いものであったからだと思います。チーム学習の進め方に対する先生の考え方（小レポートからグループレポートへ繋ぎ、発展させる）というのは、今後の学習の参考にしていきたいです。これをする事で、メンバーの一つの物事に対する見方と自分の見方の着眼点の違いなどから、問題発見、検討を行い、チーム学習が広がりをもせたからです。

『陽葉月小学校』のレポートは、私の宝物です。でも、このチーム学習を思い出として終わらせることなく、教師になった際は、ここで培ったノウハウを「即、実践！」していきたいです。

## 自己評価票

目指しているレベル：B

アピールしたいポイント：

第1章の理想の小学校『陽葉月小学校』の取り組み内容は、「本当にこんな学校つくりたい」と読み手が思うような内容です。具体的で実用的な学習指導方法も取り入れています。

第2章は、作文教育の学習実態を踏まえた指導方法は、「即、実践！」できるものばかりです。児童からの視点、教師からの視点と双方の立場に立って考えています。

第3章は、チーム学習の意義とは何か、チーム学習の原点から見た評価方法について述べています。

第4章は、今までの様々な気持ちや考えを伸び伸びと述べています。

- ① 参考文献・引用文献、参照 URL を示すことができた。
- ② 「感想」ではなく「論理」で主張できた。
- ③ 読み手が読みやすいように配慮することができた。

## レポート公開同意書

後輩への公開について（1）

web上の公開について（1）

2005年1月21日 田辺 俊英